

科学図書館ブックレット

雑纂

村田 全著



科学図書館

雜

纂

村田
全

目次

芥川龍之介の弱さについて	三
忙しさについて	三
教わることと自ら学ぶこと	一七
泥くささ	三
学問としての数学史	三
連句へのお誘い	三
廣瀬健君のこと	四
連句へのお誘い	四

3 芥川龍之介の弱さについて

芥川龍之介の弱さについて

何も云ふことをもたない内から

喋舌らうとしてあせるものは、

何事も云はないで了ふといふ

危険が大である。

——ロマン・ローラン——

世の中には、弱い不幸な人間がある。しかし人は本當の彼をしらない。彼は益々孤独になる。そして益々弱く且つ不幸になつてゆく。芥川も亦その一人であつた。

才子、文人、新技巧派……彼をみる人の眼鏡はかゝる偏つた色に曇つてゐた。少くとも本當に死を實行した「彼」があらはれる迄は、彼は常に新技巧派の巨匠であり、その作品は理智的な、謂はゞ人生の傍觀者の作品とも云ふべきものであつた。彼が眞面目な人生の追求者であり彼の文學がその血を以て描かれたものだつたといふ事が（たとひ一部の人達の中にでも）知られたのは、終に彼の死後であつた様である。言ひ換へれば彼は自らの死を以て始めて自己の眞面目を買ひもどした作家であつた。

無論人は誰でも自分を理解さるゝ事なく終るものではあらうが、何故彼はかく迄自己を知つてもらへなかつたか。いくつかの理由があらうと思ふ。然し今此處で私の云はんとする所は彼が此れ迄

の日本の知らなかつた複雑な都會人作家としてあらはれた事である。複雑とは何を意味するか私はそれを次に述べる。

「芥川は都會人だ都會人だと思つてゐたが結局僕と同じ様な孤獨な人だつた。」といふやうな事を云つたのは確か佐藤春夫であつたと思ふ。芥川はかくの如く孤獨をあく迄孤獨に守つた人であつた。尤も初期から晩年にかけて彼は何度も訴へてゐる。しかし氣が弱かつたせいかも知れない、その訴へは確かにか細そかつた。羅生門にかゝげられた「君看雙眼色。不語似無憂。」といふ巻詩。更に進展する「わたしは不幸にも知つてゐる。時には嘘に依る外は語られぬ眞實もあることを。」然しせいぜい大正五年頃の初期の作品「孤獨地獄」の中に「或る意味で自分も亦孤獨地獄に苦しめられてゐる一人だからである。」とかいた彼を出なかつた。しかもそれ位の告白ですら、年と共に次第に二重、三重の反轉の彼方へと追ひやられて行つたやうに思はれる。そして時には又負惜みの様な言葉をそれとなく腕曲にもらして見るのである。曰くストリントベリも金さへあれば「痴人の告白」は出さなかつたのである。

芥川の中には勿論單純な都會人芥川があつた。然しそれと同等或はそれ以上に強い野蠻人芥川も亦彼の中に住んでゐたのである。その二人を住まはせた「彼」は複雑である。しかも尚悪い事には彼はその相反するどちらにも徹したがつてゐた。自由恣意思と宿命、神と惡魔、美と醜、勇敢と怯懦と、理性と信仰——その他あらゆる天秤の両端には、good senseをもつべきであるといつた芥川ではあつたが彼は遂にその道を辿れなかつた。力は常に否定的な方向にはたらいてゐた。彼の中の野蠻人は眞面目になつて人生に訴へんとした事であつたらう。然しその邪魔をしたのは常に都會

人芥川であつた。かといつて都會人芥川も亦徹底的に野蠻人を組みしく事をなしえなかつた。その結果があつた。後で思へば、とうなづかせる様な裏をもつた作品となつたのだと思はれる。人間芥川——野蠻人芥川はその裏に如實に現はれた事であらう。然し生きてゐた當時の都會人芥川を見た人達が、どこにそこ迄氣をまはず手懸りをみただらう。人々の芥川を知りえなかつたのも無理からぬことであつたかも知れない。

尤も此の「二人」の存在は、彼の作品を前時代のそれと切りはなしたその複雑性といふ點に於て、それに好結果をもたらさずにはおかなかつた。即ち一つの物を「二人の眼」で見ることが出来るといふ點である。異つた二つの觀點から芥川は常に解剖をほし、にする事が出来た。その心理描寫や藝術作品の描寫等にもあらはれた妥協を許さぬやうな科學的觀察眼はこゝに宿命的な、その端を發つしてゐると思ふのである。此の二人が後天的に芥川に具つたとは私には考へられない。芭蕉とその弟子、馬琴、袈裟、良雄、更に下つては將軍N等々——巷間の英雄は彼の嘲笑と諷刺との前に於て、遂に一匹の人間にすぎなかつた。歴史小説はかくして最も明白に彼の眼をあらはしてゐる。従つて又彼の個性の最もよく現はれたのも(特に前期の作品では)これらの歴史小説だつたであらう。而も芥川は此の二つの眼を歴史小説にのみならず、大なり小なりあらゆる方面に使つてゐた。そのものつともよくあらはれたものは彼の中期を代表すべき「藪の中」や「報恩記」の見方であらう。私はその中に彼芥川の透徹した眼の色をみて慄然とした事を覚えてゐる。かくして彼は「つぎはぎだらけのカンバスばかり」はつてある人生の舞臺の裏側を——みてはならない人間の誠を——常に見且前期の彼の如き逆に之を誇らんばかりであつた。しかし彼の本當の氣持はその誠の中に、人生に對

する幻滅を深めて行つたやうである。人生は掘りさげても、誠にみちてゐる。それを越えれば純粹な美しい人生があるやうに思ふのは文學青年的な自己欺瞞にすぎない。しかも芥川の眞意は單純にも之を求める所にあつたのかもしれない。ただその單純さを掩つた彼の鍍金は常に複雑以上の複雑さをもつてゐる。しかし兎に角その單純な氣持は時にあらはれる温い抒情味となつて東洋的なゆたかさをその作品に加へてゐた。自分の懷疑主義を淋しくながめてゐる様な感じのする事もあつた。此處にも私は又二人の芥川を見る。温い文人芥川と冷徹な科學者芥川とを。彼は實にあらゆる方面に於て二つの眼を働らかせながら更にその上に今二つの眼を加へて行つた。複雑な——少くとも複雑な道程をもつた——心の持主であつた。二つの眼が健全に他を嘲けてゐる間はいい。一度その眼が互にむき合はされた時はどうであらうか。鏡をじつとみつめる時のあのせつない苦しさ、その二乗された様な苦しみが彼を襲つたに違ひないのである。自分自身の偽りをお互の芥川龍之介が睨み合ひ、暴き合ひ傷け合ひ、その結果が猛烈な自己嫌惡となる。それから先は私等の淺薄な頭には解る筈がない。云はば辯証法に敗北する、といふやうな反轉をくりかへして敗北の極北に達したといふ感じがする。彼の目はいろんな事を知りすぎる位知つてゐた。人間が人間獣にすぎない事も、しかしそれは人間が又神である事を——獸は神の別名である事を——見ようとしなかつたやうである。少し長いけれど、此の時の自分の姿を彼は次の如くのべてゐる。

「彼はアナトオル・フランスから十八世紀の哲學者たちに移つて行つた。が、ルツソオには近づかなかつた。それは或は彼自身の一面——情熱に驅られやすい一面のルツソオに近い爲かも知れなかつた。彼は彼自身の他の一面——冷かな理智に富んだ一面に近い「カンデイイド」の哲學

者に近づいて行つた。

人生は二十九歳の彼にはもう少しも明るくはなかつた。が、ヴォルテエルはかう云ふ彼に人工の翼を供給した。

彼はその人工の翼をひろげ、やすやすと空へ舞ひ上つた。同時に又理智の光を浴びた人生の歎びや悲しみは彼の目の下へ沈んで行つた。彼は見すばらしい町々の上へ反語や微笑を落しながら遮るものゝない空中をまつ直に太陽へ登つて行つた。丁度かういふ人工の翼を太陽の光に焼かれた爲にとろろ海へ落ちて死んだ昔の希臘人も忘れたやうに。……

之は彼の遺稿の一節であつた。

然しその時の彼芥川白身の歴史は、歴史小説以上の明白な浮彫として彼自らの手で創作された。「藪の中」や「報恩記」のやうなものは今はもうかきたくないのだ——彼は一轉した。「玄鶴山房」「蟹氣樓」何かしらストロントベリの暗さを思ひ起させる様な作品がつゞく。それは「河童」のやうな諷刺にとんだ作品に迄もくらゐ光を投げかけてゐる。——更に一轉する。「闇中間答」「齒車」「或阿呆の一生」「或舊友に送る手記」——私は之を未發表のまゝ終つた小説だと思つてゐる。——「西方の人」……そこには健全な力はないかも知れない。然したとひ日光はなくとも、冴えきつた利鎌の様な三日月の淡い美しさはある。目を掩はせる様なそれらの一葉の作品の中には、これでもかゝと絶叫しつゝふるはれた弱いしかし鋭い剃刀の刃が我々の心に悲しい傷痕をのこしてゆく。それは近代日本の生んだ聖書であつたと同時に(註)「西方の人」の中のクリストは龍之介とおきかえる事が出来るのである。)又悲しい「此の人を見よ」であつた。が、此處に於ても我々の注意すべき大切

な事は、芥川を見直さすべき之等の作品が發表された時には、既に芥川が死んでゐた事である。

彼は遂に假面の下に倒れてしまつた。最も初期に屬する「ひよつとこ」の中に彼の描いた山村平吉の中には晩年の芥川がそのまゝ現はれてゐる。私は彼が大正四年といふやうな若い時代にかゝる作品をのこした意味がわからない。才氣喚發といつた時代の彼が自畫像として平吉のやうな人間をこしらへる筈はなかつた。現に彼が「理性のわたしは教へたものは畢竟理性の無力だつた」と云ひ又「彼は惡黨になる事は出来ても、阿呆になる事は出来ないと信じてゐた。が何年か立つてみると、少しも惡黨になれなかつたばかりか、いつも唯阿呆に終始してゐた。」と云ひはじめたのはやつとその死の二年前位からであつた。それは兎に角平吉の姿そのまゝになつて行つた晩年の彼は恐らくその作品をつくらしめた何物かに對して何とも云へない恐怖を感じた事であつたらう。芥川は「齒車」の「夜」の中に、ナポレオンはセントヘレナに流された後に昔自分のノートのはしにかいた「セントヘレナ、小さな島」といふ一語を思ひおこして慄然たる恐怖を経験したといふやうな事をかいてゐたが、私は之も亦自分の恐怖をそれとなく云ひあらはした彼の小説ではなかつたかと考へてゐる。そんな事はさておいて、彼山村平吉は謙つきである。酔ふた時に、自分のやつた事等皆はつきりとおぼえてゐる。しかし人に會ふと「酔ふと何もわかりませんもので。」等といつて誤魔かしてゐる。そして酔つた時の平吉としらふである平吉は同じ人間とも思へない位違つてゐる。どちらが本當の平吉か自分ながらわからないといふ様な人間である。「Janus」と云ふ神様には首が二つある。どつちがほんとうの首だか知つてゐるものは誰もゐない。平吉もその通りである。「平吉はその後お花見の舟の中で馬鹿踊りの最中に頓死するのである。彼の最後はかうである。」

「すると其時、呼吸とも聲ともわからない程、かすかな聲が、面の下から親方の耳へ傳つて來た。「面を……………面をとつてくれ……………面を。」頭と親方とはふるふる手で手拭と面を外した。

しかし面の下にあつた平吉の顔はもう、ふだんの平吉の顔ではなくなつてゐた。……………たゞ變らないのは、つんと口をとがらしながらとぼけた顔を胴の間の赤毛布ゲットの上に仰向けて、靜かに平吉の顔を見上げてゐる。さつきのひよつとこの面ばかりである。」

彼の處女作には遂にすべてがあつたのである。

以上のように芥川は結局生前に於て理解されうる作家ではなかつた。(自殺の出來たのは考へ方によれば寧ろ彼にとつて幸福だつたやうである。)では彼はその無理解に對してどうしたか。彼は幾度か、諦めた様な意味の言葉を吐いてゐる。そして平凡に生きたがつたふりをしてゐる。「侏儒の祈り」——どうか英雄にして下さいますなといつて祈る侏儒——。「人間らしさ」——發狂したスウィフト程頭がよくない自分を喜んでゐる芥川——。かういつたものに皆この氣持を描いたアフオリズムであるが、それは結局に於ける彼の眞情ではなかつた。それは時に頭の中で考へて得た云はゞ眞情をはなれた虚偽の願ひであつた。屢々云つてゐた様に彼は將來に自分の讀者を求めてゐた。「闇中間答」の如き、彼は二度も「僕は將來に讀者をもつてゐる」を繰り返してゐる。彼は弱いくせに——そして弱いものは常であるのかも知れないが——亦恐しい野心家であつた。彼の本當の心の中は屹度「俺でも」といつた氣持、古今の天才の間に自己を並べたい氣持があふれてゐた事であらう。流石に彼ははつきりとは云はなかつた——彼は勿論レフラインされた都會人だつたのだから。しかし清水は蓋をしても常にどこかへは流れ出してくる。僕は絶望してゐるといふ事は望みにもえ上つてゐると

いふ事の別名なのである。望みのないものは絶望等知つてはゐないのである。「或阿呆の一生」の一節「制製の白鳥」の中等にも彼はこんな言葉をのこしてゐる。

「文藝上の作品に必ずしも誰も動かされないのは彼にははつきりわかつてゐた。彼の作品の訴へるものは彼に近い生涯を送つた彼に近い人々の外にある筈はない。——かう云ふ氣も彼には働いてゐた。彼はその爲に手短かに彼の「詩と眞實と」を書いてみることにした。

或時はもつとはつきりと云つてゐる。初めの方の一節「火花」を見よう。

「架空線は不相變鋭い火花を放つてゐた。彼は人生を見渡しても、何も特に欲しいものはなかつた。が、この紫色の火花だけは——凄まじい空中の火花だけは命と取り換へてもつかまへたかつた。」彼はこんなつぶやきをもらしながら、不可能を可能にせんとするその試みをくりかへしてゐた。創作は「三分ノ人事、七分ノ天」である。その言葉を引用した事のある彼であつたが、彼は己れを知らぬもの以上にその言葉をしらなかつた。そして最後にトライにトライを重ねた後、遂に自分も亦笑ふべき遼東の豕だつたとわかつた時に——彼が必ずしもそれであつたか否か、それは私には何とも云へない。只彼のその時の狂ほしいばかりの精神状態が時として彼自身をかく絶望させたのであらう事は想像される。——兎に角その時に彼は理性の無力を見、自らの中に或る阿呆の悲喜劇を見、遂にその一生を無意味と迄も考へた事であらう。これも亦彼の死の一因のやうに考へられる。只それが果して死の外には解決の見出しえないものであつたかどうか、それは彼の外には——少くとも彼の様な弱さをもつた人間以外には——解る筈はない事であらう。科學はかういふ人間の主観に對して遂に一厘の力ももつてゐないんだから。彼は結局東洋的な「あきらめ」に任しえなかつた。そ

して自らの自負心と、自らの自己懐似の鬭争の前に倒れた。——之が讀者の無理解に對した彼の態度の結末だつたやうに思はれる。

尤も、彼がもつと強い人間であつたならば、勿論自殺等といふ事もしなかつただらうし、又その野心にしても絶望を忘れて貫き徹された事と思ふ。事實あの「齒車」や「阿呆の一生」等を一步放れて一個の小説として再現する事が出来たならば、芥川が讀んで泣いたといふ志質直哉の「暗夜行路」なんかを遙かに越えた輝かしい金字塔ピラミッドが完成されてゐた事であつたらう。芥川の歩んだのは九十九里の里程であつた。一里——天才を我々から切りはなすべきこの最後の且最大の難關たるこの一步——彼は之を此の上なく願つたに拘らず輝かしいこの一步を印しないでその行路は終に百里に達しなかつた。凡人のゆきうる最大級の距離を歩んだ彼ではあつたが。この邊はたしかに彼の非力であつて、致し方のないものだつたらうが私は、或は日本のもつた天才の一人に加へられてゐたかもしれない「超人芥川」を夢みて、その非力の原因の一だつた性格的な弱さをそこが人間の宿命なのだとは考へてゐながらも惜しまずに居られないのである。尤も弱さといつても彼の弱さは單純なそれではない、即ち天性の弱さに拍車をかけた複雑な二つの自己の鬭争もそれであるし又逆に彼がその分裂した自己を統べえなかつた點も亦たしかに宿命的な彼の弱さであつた。此の二つはどうどうめぐりをやりながら全體の芥川龍之介を限りない疲勞困憊の中に逐ひやつて行つた事であらう。勿論個人的な幾多の理由或は時代の流れと喰ひ違つた彼の信條、それらも皆その破滅の立派な原因であつたらうが。かういふ所をみると結局我々は誰も宿命論の中に逃れてゆかなければならない様な感じもする。一は遂に一に終らねばならなかつた。そして終つたんだといつた風な感じがする。然

しそれは私又の考へかも知れない。」

彼の弱さ——それは、終生かはらずに彼の心の或はその作品の底を流れた温さとなり、進んではすみきつた俳の世界ともなつてあらはれたであらうし、(芥川のもつた抒情味といふもの、出發點を私はこゝに求めるのであるが)時には彼の絶望となり、懷疑となり、自己嫌惡となつてあらはれた事であつたらう。然し私は又その弱さと丁度反對にみえる彼の諷刺、嘲笑、更に進んでは反逆的な、遇像破壊的なそのポーズそれらも終に弱さに生れた彼の強さの中に崩え出たものであつたと考へたいのである。最後に芥川の文學全部。それは彼の非力の故に——弱さに終始せざるをえなかつた、其の非力の故に——遂に古今の天才に伍する事は不可能であつたが、敗北の極地に至つた人間の絶叫は、今尚冷たく然し又熱烈に、我々によびかける何物かを持つてゐる。之丈が死を以て初めて贏ち得られた輝かしい弱さの勝利、云はゞ敗北の勝利であつたらう。

(出典不詳)

忙しさについて

昨年の初夏、私は二年ぶりにパリから帰ってきたが、物価の上昇もさることながら、しばらくは人びとの忙しさ、その動きの慌しさがしきりに気になった。外から見ての動きばかりでなく、例えば学問のような内的な仕事についてもである。この頃その印象が少し薄れてきたと思ったら、どうやらそれは、こちらがその中に巻き込まれたためらしい。

もちろん忙しさ、慌しさを一概に悪いと言うのではない。事実、数学史のように外からはのんびりやっつけていけそうに見える学問でも、本気でやるとなると、のんびりはしておれないもので、そうした忙しさは所詮どの仕事にもついてまわるものなのであろう。ただそれにしても、ばたばた走り廻るような忙しさと、何か本物である忙しさととは厳に区別せねばならない。日本へ帰ってから忙しさが、本筋のものなのかどうか、それがいささか気にかかるのである。

私がパリで所属していたのは、国立図書館の北隣りにある「科学史・科学哲学研究センター」で、有名なオペラ座の東、数百メートルの所にある。建物自身、十七世紀に造られた歴史的なものだが、観光ルートを外れているため、別に見に来る人もない。人間の身長の一倍半はありそうな重々しい扉や、三階の広間の壁一杯に掛けられた十七世紀もの大きな絵など、研究所というよりは博物館か、むしろメリメあたりの歴史小説に出てくる館のような感じの建物である。雰囲気の中に歴史が生きている、などという気障っぽいかもしれないが、少くとも現在の日本ではまず求められない環境であり、こんな処にいと、ばたばた走り廻る気にはとてもならない。

その半面、当然といえば当然ながら、仕事の能率の面から見ると、それはあまり有難い^{ありがた}建物ではない。冷暖房のことなどは言わぬとしても、困るのは個室の乏しいことである。実際、所長秘書のための狭い一角を除いて、所長のタトン教授の専用私室すらない。別に地下鉄で幾駅か行った所に、二つばかり研究室が確保されてはいるのだが、生活の不規則な私の場合など結局使いものにならず、用のある時以外は専ら^{もっぱ}自宅にこもる結果になった。

もっと意外だったのは複写設備の貧弱さで、日本では十年以上も前に使われなくなったような旧式の機械が一台あるきりであった。これを使う時には、専任の婦人が暗幕を引いた上で一ページあたりのコピーに一分だか二分だかかけている。いくら史料原典が近くにある国でも、これは少々忙しくなさすぎるといえるものであろう。もちろん国立図書館や、大学に行けば最新鋭の複写設備は整っているのだが、本拠に設備のないのは何としても不自由であった。科学史研究などに金の出ないのは、日本に限らないというだけのことかもしれないが、この辺の悠長さはさすがの私でも羨む^{うらや}気にはなれなかった。

別の面で、特にパリに着いた頃に一番困ったのは昼休みの使い方であった。研究センターは十二時から二時まで閉館で、その間は一同が締め出される。慣れない内は、食事をすませてもなおたっぷり一時間以上の時間があり、仕方なく葡萄酒ばかり飲んでいたら、三時からのセミナーで完全に眠ってしまったこともある。ところが一旦この習慣に慣れてしまうと、たっぷり時間をかけて食事を楽しみ、あちこち散歩でもした上で、やおら仕事に取掛するというのは、結構な社会慣習だと思うようになった。心掛けてはみたものの、忙しい日本でこの真似だけはできそうにない。

こうしたあれこれの経験の中で特に忘れられないのは、パリを離れる間に、センターのコスタベル教授と交わした短い会話のことである。コスタベル氏はライプニッツの研究などの著書のある近世科学史の専門家で、根は親切な人だが、仲々皮肉のうまい一言居士である。私の話に対してもよく鋭い批判をしてくれて、その点大いに啓発されたのだが、困ったことに、こちらのフランス語の割にそちらの表現がうますぎて、直ちにピンとこないことがちょいちょいあった。私が集合論の創始者カントルの用語の分析について話した時の批評などは、その典型的な例で、この時ばかりは、同席のフランス人の中にも私の肩を持ってコスタベル氏の説に疑問を呈する人がいたほど、その批評は難解に聞こえた。コスタベル氏のその時の批評は、要するに、私が集合論のカントルの多用する用語を中心に分析を進めたのに対して、それでは不十分で、一回しか使われていない用語など、頻度の少ないものも考慮せねばならないというようなことであった。私はその本意が計りかねて、二度たずね直してみたのだが、何だか批評のための批評のような気がして、深入りしなかつたのである。

ところが帰国の日が迫った頃、それが何となく気になってきたので、私はもう一度そのことをたずねてみた。例の大きな絵のある広間でのことである。コスタベル氏はどこかから、アダン・タンヌリ編の厚ぼったい『デカルト全集』を二冊ばかり持ち出してこれ、あちこち開いて見せられた。見ると驚いたことに、『幾何学』『気象学』『光学』などの各ページに、それぞれの途中で一度しか使われていない用語が、何度も使われている用語と共に、一々色を区別してアンダー・ラインしてあったのである。コスタベル氏によれば、これによって概念形成の過程が明らかにされるといふ。なる

ほど或る論文で一度だけ使われた言葉が、次の機会に何回か使われ、次いで術語として固定される
 ことが明らかになれば、それは確かに重大な論点になる。問題はそういうことがいつでも現われる
 かというようなことだが、それにしても、或る言葉が或る論文の中で「一度しか使われていない」
 ことを確定するというのは、まことに恐るべき仕事であって、私はその努力には完全に胃を脱いだ。
 「これはいつ発表されるおつもりです?」。

「さあ、何年かかりますかな。ハ、ハ、ハ、ハ」

夕方の広間の中の、この「ハ、ハ、ハ」には、ちょっと忘れられない響きがあった。

学問というものは、本来このような悠々として道を樂しむ態^{たい}の蓄積の中で形をなすものであろう。
 学問を樂しみたいなどと叱られそうな気配もある今日この頃だが、私は、昼食と共に、こう
 したことの樂しめる忙しい身でありたいと思う。

(新幹線東京、博多間開通の日)

(筑摩書房発行『ちくま』七五号、一九七五年)

教わることと自ら学ぶこと——数学教育と集合論を例として——

今月の講師村田全先生は、現在、立教大学と東京大学で、数学(思想)史を教えておられます。数学と聞いただけで頭の痛くなる方もあろうかと思いますが、数学のテクニク的なお話ではありません。

前回(一九八一年九月)には、藤岡の生まれと言われる関孝和などの考え方を、西洋の数学思想と比較して、日本の数学思想の背後の文化的・思想的特質をお話いただき、それが『思想の群馬』にまとめられています。今回は、「教わることと自ら学ぶこと」と題して、初等数学教育をめぐって、教育の哲学的諸問題をお考えいただきます。

村田先生は、かつて高崎市立短大に奉職され、貝塚町に住んでおられました。ご子息、ご令嬢も高崎のお生まれ。いわば在京の高崎市民です。旧好を暖める意味でも、ご参加を。

先生から玉稿が届きましたので掲載します。ご高読ください。

このごろは大部下火になったが、初等数学教育の方面で一時、世界的に集合旋風が吹き荒れた。私はその方の専門家ではないが、集合論を中心とする数学思想史を専攻しているので、当時から一応の意見をもっていた。それも批判的な意見である。ただ、その意見は直ちに、数学教育とは何かとか、ひいては教育とは何かとかいった問題につながりそうなので、今まで公の場で話したことはない。しかし今回は「哲学」を問題にする場所であり、皆さんの御批判を得たいとも思うので、卒直に本音を話してみたい。かなり偏った意見ではあると思うが、半ばは素人の放言として許して頂き、半ばは、できるだけ意のある処を汲んで実りある御批判を頂きたい。

集合旋風の由来と経過

集合論とは十九世紀末に起こった革命的な数学理論である。それは無限に多くのものの集まり(集合)に関する理論として出発し、二十世紀には一切の数学理論の最も基礎的な理論にまで成長した。今日、大学で専門に数学を学ぶ学生は先ず集合論から教わるのが普通である(この辺の事情、特にこの学問のおもしろさについては、実際の話の中で少し触れる予定だが、それが私の話の主旨なのではない)。

しかし集合論が理論的学問として数学の「基礎」であることと、子供が教わり大衆が知らねばならぬ数学の「基礎」知識とどう関連するのかの問題とは全く別物である。先年の集合旋風は、学問としての集合論ないし現代数学に表面的な理解しかもたないが、新しいものの好きで流れに敏感な、いわゆる数学専門の人達が言い出し、一部の数学者や数学教師それに出版業者がそれに便乗したという面があったのではないか。それだけに、二三の有力な数学者から批判が出ると、その勢いはあつけなく衰えたように思われる。

その半面、将来の常識としてのコンピューターを学ぶためには、現代数学の或る側面を初等教育で教えるのはよいかもされない。しかしそれとても、集合まで持ち出す必要があるかどうか、私はその点にも懐疑的である。

コンピューターについていうと、これはまず腕で覚えた方がよいようである。それでおもしろくなれば、子供はどんだんのめり込む。そうなった上で、もし例えば集合論が知りたくなれば——実際、コンピューターの基礎理論を知るためには、いわゆる「有限数学」の知識と共に、大なり小な

り集合論あるいは数学基礎論なる分野の知識がある方がよい——、それを教えてやって数学のおもしろさに眼を開かせるのも一つの数学教育の道であろう（勿論、その場合の集合論は小、中、高校で教えるニセモノではない）。このようなことは、少なくとも二三の外国で、知的エリットに対して行なわれている様子である。

いわゆる数学教育への私見

私は「エリット」といい、「数学のおもしろさ」といった。これについての私見を述べる。

この言い方は問題が多いかもしれない。第一に、或る特定の学問や技術に夢中になっていては、今日の高校や大学の受験に差しさわりが生ずるだろう。第二に、「エリットのための教育」は先頃までの教育界では禁句であった。最近の教育改革の中でそれは少し認められてきたようだが、為政主導型の「エリット」志向という別の危険が潜んでいて、私には直ちについて行けない。しかし私は、こと「哲学」に関する限り、皆が走っている時に、一度立ち止って考える態度が大切だと思うので、敢て^{あえ}以上の二点を問題にしてみたい。

第一の問題について、私は、若者の心を何事かに夢中にさせることこそ本当の教育なのではないか、と答えたい（現に運動選手や芸能人などの場合には、エリット教育は公認されている）。数学あるいは諸々の学問について、こうした教育ができないことは、現代日本の素質ある若者にとって大きな不幸だと思うが、今のところ私にはどうしようもない。——人間には運命というものがある、という思いである。

第二の問題については、高校全入運動と大学の大衆化（むしろ低俗化？）についての私見を述べる。これらは、大衆の知的平均価値を上げる役に立つという意味で、一概に悪いこととは言えない。むしろ良いことである面も多い。しかしそれが時代の趨勢、特に時代の指導層の意図する方向に、意識すると否とにかかわらず、流されがちになること、そしてまた村八分を受けることもおそれず、自己の主張を培う^{つちか}ような方向とは逆に進みがちなこと、これら点には十分注意すべきである。勿論^{もちろん}、これも一般に善悪のいえることではないが、ともかくこの環境は、学問上の眞の革新や、時代の動きに対する眞の批判というような、夜明けに鳴く^{みさう}梟を育てるのに望ましい巢であるように。そしてこのことは、日本語圏に生れるであろう将来の文化が、いつか人類の文化に寄与^{いよ}しうるか否かにつながるような、大きな問題だと私は思う。ついでながら、私のいう「知的エリット」とは、大臣や大企業の社長候補者のことではなく、むしろ先駆者・開拓者として苦難の道を行くであろうような人のことである。

教育についての私見断片

何を教えるべきか、これは数学一つをとってもむずかしい問題である。教育という仕事は、時代の常識を後代に伝えるという意味でしばしば保守的になる。かつその本流は、決して知的エリットを育てる仕事ではないから、その内容が猫の眼のように変えることはまずいと思う。他方、批判や研究、一般に学問と呼ばれる仕事は、しばしば常識に対する反逆、闘争という形をとる。しかもその努力の大部分はつぶされ忘れ去られるであろうが、（知的な方面での）本当の文化はその屍の中からこ

そ生れ出るものなのではないか、ただそれに対して、人は何を、また如何いかにに教えうるのであろうか。以上、現在の教育界の実状あきに敢あて目をふさいだような意見だが、私が日頃考あえていることを述べてみた。

(『よろこばしき知識』財団法人・高崎哲学堂設立の会、一九八五年三月号)

泥くさむ

三年ばかり前のローマでの経験である。観光ルートを離れた古い街並みを散歩していたら、黒ずんだ建物の外壁に作られた壁龕へきがんに、大太りの老婆が祈っているのを見た。傍らかたわの湧き水を手ですくって何かしているのが、子供の頃、田舎の祠ほらなどで見た風景と重なり合って、意外に泥くさいものだな、という印象を受けた。

私はキリスト教の信者ではないが、専門が数学思想史なので、西欧思想史、従ってキリスト教思想とギリシア思想との相剋、共調の長い歴史には、深い関心を持っている。そんなことから、カトリック神父の宗教社会学者を初め、フランスの何人かの宗教的知識人と親しくなったが、彼らの中に見えたのも、身につききった宗教の自然さと共に、そこに時おり顔を出す一種の泥くささであった。日本にキリスト教が入って四百年、明治からでも既に百年を超えたが、日本のキリスト教はまだ綺麗きれごとで、そこにあの泥くささはないように見える。しかし宗教は本来、もっと庶民に根を下ろした泥くさいものではないか。

（『チャペル・ニュース』二五五号、一九七七年一月二五日号、所収）

学問としての数学史

時代とのかかわりを探る——息長く地道な作業

現代日本の数学は実質的には明治時代に西欧から移植文化として出発したのだが、今ではいくつかの世界的業績を挙げるまでに成長した。しかしその数学が元来どのような形で形成され、またその文化的母胎の中でどのような意義をもっていたかという種類の問題は、今日でもあまり広くは知られていない。しかし西欧の数学はその固有の文化の中に極めて深く広い根を張っており、そこには西欧文化そのものの理解に必須ひつとと思われる多くの要素が含まれている。ただそれはいわは文科と理科の谷間のような位置にあるため、人びとの目に触れにくいのである。

ここでまず日本古来の「数学」について考えておこう。周知のように日本には江戸時代の初期以来、和算という優れたすく学芸が育っていた。もともと、關孝和がニュートンやライブニッツと同じころに「微積分学」を創始したという話には、相当な誇張がある。しかしいづれにせよ和算が過去の日本文化で最大の遺産の一つであり、世界的に見ても例外的な業績であったことに疑問の余地はない。しかもその底辺をなしていた日常算数の知識は、いわゆる「読み書きそろばん」の一つとして、明治以降の大衆教育普及の原動力の一翼をになってきた。実際、明治維新の数年後に日本全国に教育網を拡げ、そこにもかくも算数を教える多数の人材を集めえたという文化の層の厚さは、これまた世界的に見ても一つの驚異である。

しかしその反面、私は和算を西歐数学とは異質な「数学」、あるいはむしろ東洋的な芸道の一種というふうに見ている。少なくとも和算は、それを基盤にして西歐数学をその文化的伝統もろとも理解できるような型の「数学」ではなかった。ありていにいえば、現代日本の数学自身、和算を切り捨てることによって今日の大をなしたのである。

ところで今日われわれが西歐文化と呼んでいるものは、決して一系で均質な文化ではない。実際それは、現代ヨーロッパ人の直系の祖先が十世紀ころから当時の先進国アラビアに学び、それを介して古代ギリヤやローマの文化に目覚め、またインドやシナの文化をも吸収して、結局十五、六世紀以後、次第に自分自身のものとして確立してきた、大河のような諸文化複合の流れである。問題はギリシア以来の数学の伝統がその中で演じてきた役割であるが、よく見ると、それは一個の技術、一個の学問という以上に、おのおのの時代の根本的問題と深くかかわり合っていたことがわかる。要するに西歐数学なるものはそうしたかかわりあいの中から、観念的世界と経験的世界とをつなぐかなめのような形で自らを形成してきた巨大な学問的潮流なのである。

大まかな話になるのは承知の上で二、三の例を挙げると、まずピタゴラス学派の哲学では、「数学」——その内容はこうであれ——は世界を理解するための基本的学問とされていたし、プラトンの哲学では、経験を超えた所にこそ真理があるという主張を示す最も手近で典型的な証拠が「数学」だとされていた。しかもそれらの思想は、中世——中世を暗黒時代とする見方は既に古い——からルネサンスにかけて、新しい文化の中に再生し、世界観や技術の革新と手を携えて、いわゆる「科学革命」の推進力となってきた。近代の数理的自然科学はその思潮の結晶に他ならない。考えてみ

ると、『自然に内在する法則性は「数学」によって表現できる』という考え方は決して自明のことではなく、上記の一連の動きの中で時には血をもってあがなわれてきた人類の知恵であり、シナやインドのあの高い文化も、また和算にしても、自分の力ではついに到達できなかったことなのである。このような目で見ると、現在、数学が電子計算機の力をかりて政治や経済などの社会現象にまで影響を及ぼしつつある状況なども、同じ科学革命の新しい展開と考えてよいのではないか。

ところで多くの人はこのような歴史について知る機会をほとんどもっていない。もちろん、過去にそれだけのことがあったからといって、今日のわれわれが遠い外国の古い伝統を隅々まで知らねばならぬという道理はない。しかしここで改めて考えてみたいのは、他ならぬ西欧文化の形成過程である。既に触れたようにそこでは近世ヨーロッパはもとより、アラビアにしても、おそらくは古代ギリシアにしても、それぞれの先進文化から学ぶべきものを吸収することによって、一まわりも二まわりも大きく成長したのである。これは今日のわれわれにとつて見逃せぬ歴史である。現代日本の文化は既にその種のことを考えてよい段階に来ているはずであり、ここで望まれるのは、われわれの祖先がシナやインドに学び、やがてそれを自分のものとして展開していったあの息の長い努力なのではないか。急がば回れ、ゆっくり急げという標語は、このようなことに関してまことに適切なものと思わざるをえない。

しかし、その前になお一つ大きな問題がある。それは、この仕事に着実で本格的な研究の上に進められねばならぬという点である。もちろん、本格的な研究となると、ここで述べたような巨視的な議論ではすまされず、その伝統の一コマ一コマを克明に吟味するという地味な基礎作業が必要で

ある。例えば、今では本国でも読まれないような外国の古典を逐一検討する一方、それに関連する現代数学の分野にもかなり本格的に取り組む覚悟が要求される。その手間を惜しんでいると、本当にわれわれに必要なことはつかめずに終わる恐れが生じるのである。

今述べたような仕事には当然多くの困難が伴う。実際それは、日本古来の伝統にも明治以後の新しい伝統にもない新しい学問の開拓事業だといってよい。もとより趣味や片手間でできる仕事ではなく、若いころからその方面の基礎を習得した人にして初めて本格的に試みられる仕事である。しかもその分野を志す若者が安心して研究に打ち込める場は乏しく、史料の入手にも困難が多い。事実、外国の図書館に複写を依頼せねばならぬ場合も少なくない。そしてその努力が必ず積極的な成果につながる保証などは皆無である。苛酷かこくなようだが、これがこの学問の、むしろ学問一般の実態なのである。

もとよりこうした状況は数学史に限ったことではない。専門外のことなので、ここではあえて触れないが、和算史にせよ、東洋西洋の科学史、技術史にせよ、若い研究者の不遇を含めて、研究体制の不備はどこでも大同小異であり、明治以後の日本の科学技術史の史料保存でさえ、極めて不十分だという。このような点を克服しながら、ゆっくり急いで、数学史を含むこの種の新しい学問研究の伝統をこの国に定着させること、それは私の今後に残された大きな夢である。

〔朝日新聞〕一九七九年九月七日（夕刊）掲載

立教大学数学雑誌 (Commentarii Mathematici Universitatis Sancti Pauli) のこと

大学という所は教育機関であると共に研究機関である。立教大学でも勿論もちろん多くの研究活動が行なわれているが、ここではその一例として、『立教大学数学雑誌』を中心とする研究活動の状況を紹介してみよう。

この雑誌は教室員の研究成果発表の場として、一九五二年に創刊されたもので、欧文による専門論文を載せる。毎年一卷づつ発行されているので、現在第二十四巻、明年は創刊二十五周年というわけである。日本の私立大学の数学教室で、このような刊行物をもっている例は今のところ他にない。もっとも二十数巻とはいっても一卷は二百頁程の薄いもので、発行部数も至って少なく、大学や研究所の図書館でないと見られない代物である。しかしその半面、関係者の間では意外によく知られており、海外では《Commentarii Mathematici Universitatis Sancti Pauli》(セントポール大学数学論集)の名で通っている。「立教—セント・ポール」の名は、こうした面でも世間に知られているわけである。私自身、パリ大学理学部の図書館で、「これが貴大学の雑誌であるか」といわれて、ちょっといい気分になった経験がある。

そういえば前図書館長の井上幸治教授(文学部)も、パリでこの雑誌を見かけられ、これは国際的なものらしいとの感をもたれたと聞いたが、この幸いなる偶然の結果であろう、同教授はその後ある公おおやけの席でこの雑誌のため大いに弁じて下さったことがある。そしてそれは単に一雑誌一教室の立場からでなく、この大学における研究活動全般の推進という立場から、感謝すべきことといわねば

ならない。

その半面、もとより現状のまま、本誌は既に国際的であるなどといった気になるわけにはいかない。そこで次にその「国際性」の理想と現実を、ありのままに示してみよう。

現在この雑誌を定期的に購入しているのは、主として内外の大学や研究所、約百四十だが、その数は少しづつ増えている。その他に内外の二百近い大学、研究所、学士院などは、そこで発行されている研究誌とを互いに交換している。中には欧米の著名な大学等の発行で、こちらが気のひけるほど立派な——少なくとも厚さや印刷は桁違いな——雑誌もかなりある。例えばイリノイ大学のものは年に四巻七百頁という大冊である。そこで、せめて内容だけは……というのがわれわれの念願であるが、この辺の評価は仲々むずかしい。(楽屋からの発言は、賞めてもけなしても必ず腹を探られる!)ただ一つ言えるのは、こちらはこちらなりに交換相手を厳選していることで、最近では交換部数の制約のため、交換を断る場合が少なくない。

ついでながら、この雑誌一卷の現在価額は五十二ドル(約一万五千円)で、かなり高価である。しかも高度の専門誌なので学生に買わせても無意味であり、その方面から大学の財政負担を軽減することは残念ながらできない。ただその故にこそ一流雑誌との交換もできているわけで、交換されてくる雑誌の価額を概算すると、結果は大幅な黒字になる。というよりも、これが図書室の充実を招き、やがて教室員の研究に貢献していることこそ最も大切である。立教の数学教室の雑誌の充実ぶりには日本の大学の中では優れた方に属するが、この雑誌はそれに一役かっているわけである。

この雑誌の「国際性」を示す第二の点は寄稿者に関する点である。例えば昨年の本誌にはアメ

リカその他の海外から十六篇、国内の他大学から八篇の論文が寄せられているが、記録によると、現在までに掲載された二百六十篇の論文の内、半分近くが学外からの寄稿であり、その約四割に当る五十篇ばかりは海外からの寄稿である。この雑誌が教室員のためのものであることは昔も今も変わっていないが、その評価の高まりにつれて、ここに論文を載せてほしいとする外部の人が次第に増えてきたのである。これは一見、一私大の乏しい財源をさいて学外者の研究発表を援助しているかに見えるかもしれないが、大局的に見ると、人がこの雑誌の価値をそれだけ認めている証拠であり、私はこのことを、学問への寄与を介して立教の名を高めている仕事の一つだと信じている。その上、少なくとも数学の場合、こうしたことは決して異例ではなく、むしろ雑誌の発展に伴う必然の現象なのである。さきのイリノイ大学数学雑誌の最近巻などは、六十篇中五十八篇までが学外からの寄稿である。勿論もちろんこれは極端な例で、手本になることではないが、よい論文の集まることが教室員を刺戟し、その雑誌の声価を高め、ひいてはその大学の声価をも高めるといふ発展形態は、むしろ望ましいことと言えるであろう。当然のことながら、この間、投稿論文の採否は、教室員からなる編集委員の手で十分の吟味を経て行なわれている。

最後にこの雑誌四半世紀の歩みについて簡単に触れておく。初めに述べた通り、本誌の創刊は一九五二年で、これは、立教大学数学教室発足の三年後に当たる。吉田洋一教授（現名誉教授）を中心に、当時新進気鋭の若手が推進役となってきたもので、本田欣哉、赤撰也せきせんやの両教授は当年の若手の生き残りである。今思うと、よく三号雑誌で終らなかつたものだが、ともかく第一号はガリ版刷り、その後しばらくはタイプ印刷という見すばらしいものであった。それがいつの頃からか、急にバツ

ク・ナンバーの注文が来るようになり、事務の繁雑さの上に財政上の問題などもからんで、現在では数学教室編集、紀伊国屋書店発行という形で世界に流れている。紀伊国屋は、名古屋大学、京大の数理解析研究所などの数学論集の発行も引受けている書店である。一方、大学には編集事務や交換部数確保などのため、今も相当な支出をしてもらっている。私としては、もっと出してほしいというのも本音なら、よくここまで育ててくれたというのも決しておべっかではない。

どうも話が手前味噌みそになりすぎたかもしれない。しかし私は数学教室の宣伝というより、むしろ立教大学における研究活動推進のために物を言ったつもりである。そうである限り、『立教』というこの冊子の主旨にはかなうはずだと思ったからである。

(立教大学発行雑誌『立教』第七七号、一九七六年)

数学史学のために——奥野氏「化学史ともに」を読んで

本誌五二号の奥野久輝氏「化学史とともに」を、私は興味深く読んだ。というのは、一つにはこれが私の現在の関心事とかなり密着する面をもつていたからであり、また一つには本誌に珍しく(一)ある問題提起の意図を潜めたものと見られたからである。そこで私は多少そそくさとはあるが、それに対する一つの反応を提出しようと思う。

※

奥野氏は「文学部などの歴史関係の教室で「自然科学史」の講義がどの程度におこなわれているのであろうか」といわれ、「市上の「世界歴史」に関する全集や講座の類では、自然科学に触れるところがきわめて少ないので、つい疑問をもったのであるが、大学の講義ではまさかそんなことはないであろう。」と結んでおられる。私は同氏のこのお考えの大綱については至極同感であるが、この結びの部分に関する限り、奥野氏のお考えはなおあまいのではないかと考える。ただしそれは恐らく「文学部などの歴史関係の教室」の責任であると共に、また従来の日本の科学界ないし科学史界の責任でもあると思わざるを得ない。

そういえばつい先頃も「岩波講座 世界歴史」の内容見本なるものを見たが、ここにおいても自然科学の歴史や、それが人類の運命に与えた影響については、目次や筆者から推測する限り、その取り扱いが依然として軽少である。これは二十世紀現在における日本の歴史学ならびに科学史学の傾向というか限界というか、ともかくそういうものを見せている多くの例の一つに過ぎないと思わ

れる。また同じようなことで、戦後不遇の内に亡くなられた数学史家、三上義夫氏なども、大学の史学科において哲学史、文学史、芸術史等々はありながら、現代文化における重大な要素の一つたる科学史のない点はまことに遺憾だ、という意味のことを言っておられるが、その事情は今もつて少しも変わっていないようである。（この件については雑誌『思想』一九六七年二月号、拙稿『三上義夫とその数学史論』参照）。

このような事態は日本における学問の現状に、一つの特徴を与えており、しかもそれが自然科学にとっても人文科学、社会科学にとっても決して良好な特徴でないことは事実であろう。私は奥野氏と共に、わが国においてこのような傾向を少しずつでも改める努力がなされることを願ひ、かたがたわれわれの学園の中でも、小さいながらにそのような考えが芽をふいてくれればと願つてゐる。

※

さて以上は奥野氏の説の中で私の協調しうる側面であるが、奥野氏の場合の化学史を数学史とおきかえた場合、私のそれに関する意見の中には必ずしも奥野氏の説に同調できない部分も存在する。もちろんそれは奥野氏に議論を吹きかけるという性質のことではなく、むしろある点で相似^{あひ}てある点で相分^{あひ}れるというのが、人間の思想の普通の在り方だという程度のことなのだが、次に主として数学史をめぐる私の考えについて述べておく。

先の文章で奥野氏は自ら「化学の研究者であつて「化学史」の専門家ではない」と書いておられる。これはなかなか周到な言葉で、潜越な申し分ながら、これだけを見ても同氏は本当の「化学史」の何たるかを十分承知しておられることがわかる。しかしこれを読まれた人の中には、この重要な

一点を見過ごし、奥野氏が「停年になって教授の責任から解放されたら、ゆっくり化学史の研究に精進したい」と書いておられる処だけを見て、化学史の研究とはそのような、いわば停年教授の閑事業かと誤解された方があったのではないか。もしそうだとすれば、それは恐らく本来の化学史学に対する非常な誤解だと思う。もちろん私は化学史についてほとんど何も知らないが、数学史学あるいは科学史学一般に対する考えに基づいて、私ははっきりそう考えるのである。

実は数学史というと、人はえてして説話調の歴史物語りか学者の伝記、あるいはせいぜい諸学説の変遷に関する年代史位を考えるらしい。しかし今日の世界における数学史研究の現状は、決してそのような生やさしいものではなく、ちょうど一般史において史料の一言一句の読みや出土品の紋様の一欠一劃の意味が重大な問題となるのと同様、史料の細部にわたる極めてきびしい研究が要求される学問である。それは数学へのある程度以上の理解を要求すると共に、歴史学の方法に従い、然るべき哲学を持ってと要求する一個の独立した科学であって、たとえ数学の意味は乏しくても独自の価値と意義を認めれば、数学史学の名の下に追及してよだけの多くの問題をかかえている。人間の営みの中に歴史というものが意味をもつ以上、数学あるいは科学一般とてもその例外ではないのである。奥野氏自身、「科学史は、それ自身独立した一つの科学である」ということばがある。ことを認めておられ、ただ自覚的に「それとはすこし違った立場」をとっておられるだけなのであって、この辺のことについて誤解があつては、恐らく奥野氏の意にも沿わないことであらう。

そして私は、この点では奥野氏と違って数学ないしその背後にある哲学の歴史に、自分の今後の学問を集中したいと考えているものであるし、むしろ、より若い年代から十分の基本的準備を整え

た人びとが、この方向に志していかれることを期待している。

※

こういう大ぼらは正直の処あまり吹きたいことではない。詩を作るよりは田を作れで、余計なことを言う前に自分の仕事をするのが学問に志す者のつとめだということは、私も十分承知しているのである。ただどうも自然科学の歴史という仕事が真正正銘の学問なのだという認識は、わが国では世間一般に乏しくて、それがまたこの学問の振興を妨げつつ、今日に及んでいる。そしてこの方面は日本の科学の一番弱い部分にさえつらなるような気がするものだから、あえて多少の大風呂敷を拡げたのである。

なお私のもう少し積極的な意見は『思想』一九六九年四月号の他、『数理科学』に断続連載中の「数学史散索」などにも、折にふれて述べてある。

(立教大学発行『立教』八三号、一九六九年所収)

連句へのお誘い

一

連歌^{れんが}とは、五七五の長句に七七の短句を添え、その短句に別の長句を添え、またその長句に別の短句を添えというふうにして、合計三十六句（「歌仙」という）、百句（「百韻」）などと長短の句を並べ、次に和歌を組立ててゆく芸術、あるいはむしろ遊びである。その歴史は古いが、時代が下ると共に極めて複雑な規則がそこに加えられた。俳諧（連歌）または連句とはそれを略式にしたもので、室町時代後期に興った。俳諧はもと滑稽の意味であり、俳諧連歌も元来は、ざれ歌連歌や知恵遊び的連歌のことであった。

芭蕉はこの知恵遊び的連歌から出発し、一転これを高度の芸術にまで高めた人だが、やがてそれが高踏的な和歌の世界に近づきすぎたと見るや、更に一転して世俗的些事の中に新しい美的価値を求めて前進した。その間の状況は、彼における連句作風の変化の中に鮮明に現われている。「岩波文庫に『芭蕉七部集』、『芭蕉連句集』などがあり、東明雅『連句入門』（中公新書）、中村俊定『芭蕉の連句を読む』（岩波）などの入門書もある。」

蕉門の連句で最も広く用いられた形式は、三十六句からなる歌仙である。つまり歌仙一卷には三十五組の和歌（らしきもの）ができるわけで、その間に、四季の移り変わりから神祇釈教恋無情まで、自然と人生の百般の様相が描き出される。普通はこれを数人の仲間（連衆）で行うが、勿論^{もちろん}一人遊びも可能である（独吟）。ただし（後の拙作でも見られる通り）独吟はなかなかうまくゆかない。それは、

一人の人間の棲む世界が極めて限られており、想像力の限りを動員しても描きうる範囲は高が知れているためである。現に芭蕉一門の作品として残された独吟の例はない。

その反面、或る句にいくつかの付句を前まへ以て案じておくことは、芭蕉やその門人もやっていた節があり、独吟を一概に斥しりぞけるのも考えものであろう。実は私自身、仲間が見付からぬまま、独吟を度々試みている。勿論、素人芸で、本来、他人に見せられるものではないが、仲間を「お誘い」したい気持は以前からあった。このたび決心して、手製の独吟に私註まで付け、臆面もなく人目にさらすことにしたのも、素人芸を投げ出して仲間を誘おうという所存である。私註は解説というよりも、自分の楽屋裏の暴露にすぎない。

二

さて、連句が和歌つぎたしの遊びであることは上記の通りだが、他方、文芸としてみると、そこには他に類例を見ない独特の性格がある。まずその事情から述べよう。

例えば、連句一卷には、自然と人生の諸相を写すという一般的性格を除いて、特定のテーマや筋書きが何一つ立てられていない。これは、小説や普通の詩などの根本的な相違である。そしてこのことは連句の進行の性格をも規定する。

連句の進行は、譬えていえば、自然と人生を写す鏡の角度をパターンパターンと転換させてゆくようなものである。一人が最初に一本の直線を引き、他の一人がその一端から別の直線を引き、その位置に鏡を置いてその角度から一つの世相を写す。次に第二の直線の他端から第三の直線を引き、鏡をその位置までまわす。これを繰返して、歌仙なら三十五の面を展開するわけだが、その際、鏡の

面が前に現われたことのある面と平行同質になって、類似の情景が再度写されるような事態は極力避けられる。しかし、直線をどんな角度で引き、どんな世相を写すかは、多少の規約的制約はあるにせよ、参加各人の勝手であり、かつその線が定まれば、その先はそこまでの展開を既成事実として、その上に継ぎ足される。——これは、いわば人生の縮図である。

この展開の過程において、連句での長句、短句のつながりは、和歌の場合ほど緊密でない。むしろ一組の長句と短句は、それぞれ独立の句でありながら、その付かず離れずの組合せの中から何かしら新しい情景が浮び上る——これが蕉門連句の理想である。事実、上記の鏡の轉換の自由度は、そのような、「付きすぎ」にならないつながりの中でこそ、得られるのである。实例はいくらでもあるが、次にその一例を挙げよう。

笠敷きて衣のやぶれ綴りいる 桐葉

あきの鳥の人喰いにゆく 翁

一昨日おとといの野分のわきの浜は月澄みて 工山

〔『芭蕉連句集』岩波文庫、P 16〕

この第一句は、その前句とのつながりにおいて、しょぼくれた旅人の姿を連想させる。第二句の「翁」は芭蕉、彼は前句を、負け戦で落ちのびた雑兵とでも見立てたのであろうか、そこに新戦場の屍に群れる鳥を描いて、荒涼たる風景を現出させる。工山がそこに台風一過の夜空を配したのも、そのような心裏の風景だったのであろう。この組合せも悪くはないが、局面の轉換はこの第二句において最も見事である。

三

連句の構成や特性について極めて卓抜な説を立てたのは、物理学者の寺田寅彦である。彼はそれを、あるいは音楽や映画と対照し、あるいはフロイト流の心理分析に照らすなどして説くのだが、それらは彼の実作の経験に裏付けられていて、他に類例を見ない連句作法入門になっている。少なくとも私は、過去に繰返し読んだ芭蕉の作品の記憶の他には、寺田さんの「連句の雑俎」に最も多くを学んだと思う。『蒸発皿』所収、『寺田寅彦随筆集 (三)』(岩波文庫)にも収録。

一例を挙げよう、実は歌仙は二つ折の用紙の表裏に、「初折表」六句、「初折裏」十二句、「名残折表」十二句、「名残折裏」六句と書きつけられたものだが、寺田さんは、これを、交響曲の四つの楽章と対比する。そして連句の初折表はアンダンテ、裏はアレグロ、名残折表はスケルツォ、さらに名残折裏はラルゴカレントと見られる例の多いことを指摘すると共に、それが交響曲の四つの楽章の(急・緩・軽・快・急という)テンポと微妙にことなっていることを注意して、連句型の交響曲や交響曲型の連句はできないものだろうか、などと示唆的な言葉まで残している。

更に教訓的なのは、付句の心理に関する彼の意見である。詳しくは原文に当って頂くことにして、連句を作る際の心構えになりそうなことを私なりにまとめてみよう。

句を付ける場合、前の句Aを見て直ちに連想される事柄を次の句Bに仕立てると、大体は「付きすぎ」になって、単に平凡になるだけでなく、その次の句Cを探すのに苦労する。それは、どんなCをBと組合せても、前のABの組合せと変りばえがしないからである。寺田さんはこれに対して、Aからの連想を第一段のBで止めないで、Bから連想されることB'、あるいは更にB'からの連想

B''あたりを取れという。そして更に、その連想の動きを夢の心理に比べる。われわれは時として長い時間経過を短時間に凝縮した形で夢に見るが、それは事柄のだからとした叙述ではなく、少数のキーポイントの出来事の間を想念が飛躍すること、と説明される。連句における各々の句は、できればそうしたキーポイント的な表現でありたい、これが寺田さんの主張の骨子であり、彼はそこに連句芸術の最大の独自性を見出している。実際、「連句雑俎」の根底には、こうした角度からする卓抜な比較文化論の意図があるのである。

四

以下は一九八五年、私が東ドイツで試みた独吟で、草稿には六月一日、二日の日付と、八月三十日付の手直しの跡とが残っている。

ワイマールにて

- 初表一 暮れなずむ古き都や春の雨
- 二 ゲーテ、シラーの像の若草
- 三 絵にならぬ絵とは知りつつ筆とりて
- 四 槇の木高く秋の深まる
- 五 欠けそめの月に築地の続く道
- 六 うしろ姿は清き白髪

初折表一を発句という(俳句は俳諾発句の略)。発句は最も大切な句で、しばしば古人や先輩の好句を借りるが、ここは即吟の自作を立てた。発句には切字(作例、や)、季節(作例、春)が具わっていることが必要。

初表二を脇と呼ぶ。これば発句におだやかに続けばよい。春と秋の句は二三句続ける規則があるので、前句を承けて春。

「第三」は大きな局面転換の望まれる場所である。作例、転換が十分とはいえないが、古い都のイメージは脱却したつもり。

四句目の榎と五句目の築地、あるいは後者と六句目の白髪の人との間には、何となく相通する「句い」や「位」があるつもりだが、どうか。付け味の句いや位の釣合いは、蕉門では特に重んじられる。初折表第五句は月の定座と呼ばれ、ここまでに必ず月の句を出すきまりである。この種の定座はこのあと四ヶ所あり、連句の過度に自由な展開を要所所で締めている。

初裏一 演歌師のギター手垢に古びたる

二 ものの香りのしみし壁板

三 人去りて心おちいぬ控の間

四 わが一代の真価問うとき

五 颯として雲飛ぶ山の嶺きに

六 廃墟をむごく照らし出す月

七 初秋の百物語なお果てず

八 かわやのあたり曼珠沙華咲く

九 すれちがう汽車を待つ間の銀煙管

十 どちらからかと人の問い寄る

十一 まだ早き花の席とるごさまもり

十二 またも入試に落ちし長男

一は前の人を演歌師と見た。従って二は酒場の香いか。三はこれを由緒ある館と転じ、四はそこ
に一番を待つ人の気負い。五はその意気を承けた句で、蕉門の付け味でいう「響き」のつもり。六
は五に添えた景色だが、私は南仏のレポールの廃墟を思い出していた。なお六の前後に二番目の月の
定座がある。

七の百物語は怪談を開く集りで、その不気味さが八の曼珠沙華を呼び起こす。六く八と秋。九は
田舎の駅、そこに銀煙管の見なれぬ上客だから、人がおそるおそる声をかける。十一は新入社員か
窓際族か、十二はこれを後者と見定めている。初裏十一は花の定座。

名残表一 萱葺きの家を今日まで守りこし

二 すす払う間も唱う念仏

三 誰もこぬことよいのやら悪いやら

- 四 寝顔に恋の果てを知りそめ
 五 しどけなき紅の襦袢の乱れかご
 六 新内流し深川の夜
 七 救急の車の音も遠のきて
 八 筆は進まず締切りは明日
 九 一つ蚊に大の男の空踊り
 十 壁のとなりは何の騒ぎぞ
 十一 月見ゆる気は更になきこの宵に
 十二 雨は巴山の秋に極まる

一、二は説明に及ぶまい。三は二の人物像と何となく通いあえばよい。(実はこの種の曖昧な句が仲々むずかしく、うまくいっているとは思えない。)四、五は恋。恋の句は一卷に一箇所あるべく、かつ春秋の句と同様に二三句続けるべしとされている。六以下の移りは明らかであろう。名残表十一は久しぶりに月の定座である、十二の「巴山」は、私の好きな李商隱の「夜雨寄北」の詩をふまえたもので、付け味は別として、この句は私にとって一卷中の眼目であった。

名残裏一 白鳥の折々立つる羽の音

二 水ばかりの続く湖づら

- 三 板囲い丸太鳥居の社にて
- 四 思いもかけぬ巫女の緋袴
- 五 来てみれば花は蕾のままながら
- 六 草柔かき春のくれがた

この辺も、もはや説明は要すまい。第五は花の定座である。

ところで、この一卷には蕉門連句のにおいがする。例えば名残表十には、

壁をたたきて寝せぬ夕月 芭蕉

という前例(『七部集』文庫版、二九二頁)が思い浮ぶ。一々指摘はしないが、私の作例に句の転換の形や精神において、無意識にせよ真似ごことが多いことは自覚している。要するに、私の連句は、芭蕉の『七部集』や『連句集』を読み返してきた記憶と、例の寺田さんの説に支えられたものである。最後に一言付け加えるならば、芭蕉の局面転換の妙、マンネリズムからの跳躍の大きさなどは、私にはしばしば、方面こそちがえ、一流の数学者や哲学者の創造力の飛躍を思いおこさせるものである。

(立教大学発行『立教』一二四号、。一九八八年所収)

廣瀬健君のこと

一九五九年というと、もう半世紀近くも前のことだが、今もありありと覚えている。当時、立教大学の数学教室は現在(四号館)とは別の建物(六号館)の一、二階を占めていて、玄關脇に大学院研究室があった。そこに一群の新三年生が集まってデデキントの『連続と無理数』を読んでいたが、その発頭人の一人が廣瀬君であった。僕は野次馬根性から顔を出し、「一つ原文で読んでみないか」と誘いを掛けた。数学科の数人に物理学科の三年生二人(小嶋昭(元三菱原子力株式会社)、菊池順(早稲田大教授))も加わって、とうとう夏休み前頃までには全員でドイツ語の原文を読み通した。そこまで来るとは思っていなかっただけに、こちらに乗ってきて、途中から

「数学的には『数とは何か、何であるべきか? Was sind ……』の方が面白いし、ドイツ語はむしろやさしいから、済んだらこちらを読まないか」

とあふったところ秋口には実現して、終わった後は思い切って Gödel の「決定不能定理」の論文 *Über formal unentscheidbare Sätze ……* に挑んだ。さすがに最後まで付いてきたのは廣瀬君と故佐藤總夫君(元早稲田大教授)、ほか一人二人だったと記憶する。この論文は当時、僕自身も読んでいたので、結構、本気になっていた。廣瀬君はそれをよく覚えていてくれて、僕の定年の時に配って貰った小冊子に、

「(デデキントの本は) 当時は翻訳書がなく……その内容は『集合論の神話時代』といったもので、村田先生の御教示がなければ正確には読み切れなかつたろう」

などという一文を寄せて、僕を持ち上げてくれた。あの読書会のことは、四十年近い僕の教師生活の中でもひとときわ幸せな思い出である。

四年生になったとき、廣瀬君はあるいは僕に就くかと思っていたが、（この辺の記憶はおぼろながら）トポロジーをやると言ってその専門家（三瓶教授？）に就き、大学院では赤攝也せきせつやさんに就いて本格的に基礎論を始めた。僕は大魚を逸したような気になって少し寂しかったが、彼が大をなすにはその方が正解だと思って、むしろ若い彼の見識、眼力に感心した。彼は赤せきさんの指導の下で修士論文を書いたが、その公聴会で、折から盛んになりつつあった「unsolvability of the degree」に関する彼の修士論文に接したときには、僕の期待が見事に実現したことを知って嬉しかった。その後の彼の仕事については多くの人が語ってくれるであろう。

彼は秀才だったが、半面大変な野次馬であった。数学科一年生の頃から力学や電磁気学など、物理学科の単位をいくつか取ったようだが、それは学問上の本筋のこととしても、放射線管理士の資格その他、色々な資格を貪欲に取っていた。また高校時代から水泳指導員の資格も持っていたし、空手の有段者と聞いた覚えもある。こういう学生は得てして散漫になるものだが、彼は見事に基礎論の専門家として一家をなした。今にして思うと、数学ではわが及ぶ所でなかったの感が深い。

そのことの一面として彼は友情に厚い人でもあった。呑み友達のこととは（佐藤總夫君がいらないのが残念だが）その方面の知友に委ゆたねるとして、読書会の時にも落伍しかけた友人を励まして続けさせたり、またずつと後のことだが、僕に就いて基礎論をやった大学院生の相談にもよく乗ってくれた。あまり体を動かしたがない僕を誘って、家族づれで弗沢の滝に仲間と共に遊んだこともあり、彼

らが御代田の別荘地で過ごした夏休みの旅行に誘われて、家族で志賀高原に出かける途中二日ほど同行したこともある。これは僕が今信州に暮らしている切掛けになった出来事で、もはや失われた四十何年前の、月見草咲く松林で車座で話し合ったことなど、忘れがたい過去の一コマである。

彼は大分の出で、幕末の大儒、廣瀬淡窓につながると聞いたことがある。だとすれば、淡窓の名も健だから健君の名はそれを継いだのであろうか。彼が若年東都に遊学し、壮年は教育大からアメリカに研鑽し、それぞれ仕事でも遊びでも良き交友を持ち得たことを思うと、淡窓の有名な七言詩の起承

休道他郷多苦辛　　いうをやめよ他郷苦辛多しと

同袍有友自相親　　同袍友有り自ずから相親しむ

(同袍は同じどてらで暮らすような親しい関係)

は確かに健君の一面を伝えている。「後あり」と言うべきであろう。

惜しむらくは好漢、神に愛されることのやや深きに過ぎたか、夭折とは言えぬにしても、もう少し生きて仕事を続けてほしかった。早稲田大学で行われた葬儀の時、赤さんが

「ああ、天われをほろぼせり、天われをほろぼせり」

と天を仰いで嘆息したのを昨日のここのように思い出す。多少蛇足になるが、これは孔子が高弟顔淵の早世を嘆いた言葉で(顔淵死　子曰　臆　天喪予　天喪予、『論語』)、彼にとって廣瀬君は顔淵のような存在だったのかと、しみじみ思ったことである。

(二〇〇四年三月)

(『廣瀬健の思い出』、『廣瀬健の思い出』刊行会、二〇〇五年四月。非売品、所収。)

連句へのお誘い

一

俳句はいまや流行過剰なほどだが、そのわりに連句は知られていない。僕もさほど詳しいわけではないが、おもしろそうなのでお誘いをする。なお、「俳句」は「俳諧の発句」の略で案外新しいらしく、正岡子規の案と聞く。

連歌とは、五七五の長句に七七の短句を添え、その短句に別の長句を添え、次々に和歌らしいものを組み立ててゆく芸術、あるいはむしろ遊びである。その歴史は『新古今和歌集』から『万葉集』にまで遡られるが、時代と共に煩雑な規則が増え、室町時代の終わりには本式連歌への手引きとして、略式の「俳諧之連歌」が生まれた。または「俳諧」、「連句」ともいう。俳諧とはもと「おどけ」「滑稽」の意味である。

俳諧はその後、西山宗因（一六〇五―一六八二）によって、しゃれや艶笑で句をつなぐ知的遊びとして一世を風靡し（談林派）、若き日の井原西鶴（二六四二―一六八三）や松尾芭蕉（一六四四―一六八四）もその門に入る。西鶴はやがて小説に転じ、芭蕉は俳諧の「この一筋に」つながって、それを高度の芸術にまで高めた。

芭蕉は四十歳までに談林派の宗匠としてかなりの声望を得ていたが、四十の時江戸で大火に遭い、故郷伊賀では母を亡くすなど、人生の無常に目覚めて、故郷や奥の細道など多くの旅に出た。「西行

の和歌における、宗祇の連歌における、雪舟の絵における、利休が茶における、その貫通するものは「一なり」として、連句を同じ水準の芸術と見たのもこのときである（『笈の小文』）。旅の途上、作風を二変三変しながら多くの弟子を育て、五十の時大坂で病歿した。その間の十年、一旦、古典芸術の高みに近づきながら（『猿蓑』）、敢えて一転して世俗的瑣事の中に美的価値を求めて前進した（『炭俵』）。その間の十年の飛躍の高さは、世界的に見て稀である。主著『芭蕉七部集』（岩波文庫）四十歳以後の、名古屋（『冬の日』、『春の日』）、江戸（『暖野』）、京都（『ひさご』、『猿蓑』）、江戸（『炭俵』、『続猿蓑』）での七篇で、各篇の選択、編集、出版は芭蕉や直弟子のもの丈ではない。中村俊定『芭蕉の連句を読む』（岩波）、暉峻康隆『芭蕉の俳諧（上下）』（中公新書）などの優れた解説書がある。

連歌の「付句」の数の標準は百（「百韻」）だが、蕉風ではやや簡略化されて三十六（「歌仙」）が多く用いられた。これを数人の「連衆」で「巻く」、つまり組み立てるのである。もちろん一人遊びも可能でそれは「独吟」と言うが、なかなかうまくゆかない。それは一人の人間の棲む世界に限られていて、想像力の限りを動員しても、描きうる世界が同語反復的で平板になるからである。現に芭蕉の周辺の作品として残された独吟の例は知らないが、その反面、ある句にいくつかの付句をあらかじめ案じておくことは、芭蕉自身にもその例がある。ほんの一例として、

いのち嬉しき撰集のさた 去来

さまざまに品かはりたる恋をして 凡兆

浮世の果は皆小町なり 芭蕉

がある。この芭蕉の句は、「折りがあれば使いたい」と考えていたものようで、彼はこの時、弟子に付句つけくについて話している。次回はこの件から解説しよう。

二

前回は『猿蓑』の第二歌仙から三句を取った。

- (30) いのち嬉しき撰集のさた 去来
 (31) さまざまに品かはりたる恋をして 凡兆
 (32) 浮き世の果は皆小町なり 芭蕉

(30) はそれ以前の句の運びから、西行のような歌僧を連想したものと見られている。去来は最初、西行が源頼朝に和歌のことを訊かれ、「和歌の奥義おくぎは知らず候」と答えたという故事を連想して、そのまま付け句にしたが、芭蕉から「その連想はよい。だが西行に決めたのでは、事が確定し過ぎて先が続けにくい」との注意を受け、このように西行の「倂おもかけ」を取ったという。

(31) はその倂おもかけの人の恋の遍歴だが、この二つを一对にすると一幅の絵が浮かぶ。これが連句である。これに対して (32) は芭蕉が前以て用意していたものというのは前回に述べたが、この小町は晩年の落魄らくはく後のことで、(31)とのつながりには人生の哀愁が漂う。

ここまでに西行や小町がたが、それは偶然の成り行きで、初めからこの主題を入れねばならぬという決まりはない。連句は要するに連衆(参加者)が助け合って一卷を巻く遊びなのである。歌仙一卷は所詮このような連想遊びに過ぎないが、連衆の競争でなく調和の努力は大切である。それが連句の大きな文化的特色である。

次に右の歌仙を一々解説しつつ、その規則の説明をしてみよう。歌仙一卷の内、初めの六句を「初折表」、次の十二句を「初折裏」と呼ぶ。次の十二句と六句が「名残折表」と「同裏」である。また第一句は「発句」で、今と同様、切れ字と季節が必要である。第二句は「脇」と呼ばれ、季は発句に従い、発句と穏やかにつながる事が求められる。以下「第三」から、上記のような連想の転換が始まるわけである。一卷の最終を「揚句」という。

ここで大切なのは一卷の中に大事な句を配置する規則である。特に花と月は場所が決まっております。「定座」。花月を始め春秋の句が出ると同季を二三句続け、夏冬は原則一句とする。また人生の華である恋は場所の指定こそないが、(31)や(32)のように二三句続ける決まりである。

この歌仙の「初表」は次の通りである。

- (1) 市まち 中なかは物のにほひや夏の月 凡 兆
- (2) あつしあつしと門かどかどの声 芭 蕉
- (3) 二番草取りも果さず穂いに出て 去 来
- (4) 灰うち叩くうるめ一枚 凡 兆

- (5) 此筋は銀かねも見知らず不自由さよ 芭蕉
 (6) ただとひようしに長き脇わき指さし 去来

(1)の切れ字は「や」、季は夏、従って脇も夏、この(1)と(2)の景色は町中らしいのに、(2)と(3)では田園風景に変わり、田植え後の二度目の草刈りも終わらぬ内に稲の穂がでるといふ暑さが描かれる(夏が三句続くのは異例)。なお「第三」はこのように「て」で止める例が多い。

(4)と(6)は無季、(5)は「月の定座」の一つだが、月は今回、発句ほくくに「引き上げ」られている。うるめいわたし鯛は粗末な食事、銀は京大坂や江戸は別として、当時まだ使われていないのに、異常に長い脇差という無粋な滑稽。

連句の本当の味が出るのは、神祇じんぎ釈教しゃくきょう恋無常こいのむじょうが解禁された「初折裏」からである。

その説明のために物理学者寺田寅彦の『連句雑俎ざっそ』を取り上げたい。それによると、句Aを見て直ぐ連想される景色Bを次の句に仕立てると、だいたいは「付けすぎ」になり平板だし、その先にどんな情景Cを付けるべきかがうまく行かない。Bから連想されるB'、またはB'からの連想B''を取るのがよい、という説である。

連句の付け句の法には古来いろいろの議論があるが、僕もつばらこの方法によっている。例えば(2)に氷水を付けたのでは同様の夏景色ばかりで平板に過ぎよう。歌仙はこの意味で、人生の種々相を巧みに切り取り、それを微妙につなげてみせるものと言っても良い。

「名残折表」の十二句を挙げる。

- (7) 草村に蛙かはすこはがる夕まぐれ 凡兆
- (8) 露ふきの芽ことりに行あん燈どゆりけす 芭蕉
- (9) 道心のおこりは花のつぼむ時 去来
- (10) 能登の七尾の冬は住うき 凡兆
- (11) 魚の骨しはぶる迄の老を見て 芭蕉
- (12) 待まち人びと入いりし小こ御み門かどの鑑かき 去来
- (13) 立ちかかり屏風を倒す女おんな子こ共ども 凡兆
- (14) 湯殿は竹の簀すの子こ侘わびしき 芭蕉
- (15) 茴香ういきょうの実を吹落す夕嵐 去来
- (16) 僧そうやや寒く寺にかへるか 凡兆

場所の制約から、丁寧な解説は中村俊定『芭蕉の連句を読む』等にゆだねて、以下は略解である。(7)は長脇指の男の意外な臆病さ、(8)は例えば局つぼねの女の振る舞いであろう。(9)で、なぜ道心がでるのか、中村氏は行燈あんどんの火の消えたのからの連想としているが、この程度の想念の飛躍は許されるのである。

(10)で能登の七尾がでるのも、中村氏によれば、西行への芭蕉の傾倒に応えたもので、道心の人の

おもかけ
 俳である。(11)の「しはぶる」は「しゃぶる」で、(10)の風景に棲む別の人物を配したものである。

(12)、(13)は『源氏物語』(末摘花)の翻案で、物語の一節を取って、(10)の人を門番の翁としたものか、(13)が(12)につながるのは宮廷生活だが、(14)に続くときには、離れて旅籠はたごの湯殿などを想像したらしい。裏の五六句目に月の、十一句目に花の定座があるが、(9)に「花」がある等の事情でまた例外である。この連句には例外が多く、実例には不向きだったかもしれない。

しかし、以上では付け味がよいか悪いか、独りよがりか否か等は、よく分からない。このような問いに答えがあるかも問題だが、この解説は次回にしましょう。

三

『猿蓑』の第三連句の前半の解説を終えるはずでしたが、お詫びが二つあります。一つは前半の最後の二句を落とした事、次は上野洋三『芭蕉七部集』(一九九二年岩波セミナーブックス)の出版を知らず、伝統的な「去嫌きりきらひ」の心得を軽視したことです。ただし今の所、間違いは書いていませんが慙愧です。

前回の脱落は

- (17) さる引きの猿と世をふ経る秋の月 芭蕉
 (18) 年に一斗の地ち子しはかる也 去来

この初折り裏は花の定座だが、初表(3)で花が出たので、変わりに月を出したか。(18)の地子は猿引きの地代、ここからが名残の折りです。

- (1) 五六本生なま木きつけたるみずたまり 凡兆
- (2) 足袋たふみよごす黒くろぼこの道みち 芭蕉
- (3) 追おたてて早はやき御おん馬まの刀かたな持もち 去来
- (4) ででちが荷にふ水みづこぼしたり 凡兆
- (5) 戸障しやうじ子こもむしろがこひの売屋敷うりやしき 芭蕉
- (6) てんじやうまもりいつか色いろづく 去来

(1)(2)は道路の有様、その悪い道を殿様の家来が傍若無人に走る。(4)はその間の滑稽模様。(5)は一転して売り屋敷を出す、僕は(6)の「天井守り」を魔よけのお札かと考えていた。実は唐辛子の下げたものだったが、素人の鑑賞にはまあ良しとするか。

- (7) こそこそと草鞋わらぢを作る月夜さし 凡兆
- (8) 蚤のみをふるいに起きし初秋はつあき 芭蕉
- (9) そのままにころび落ちたるおとし升落のぼりおとし 去来
- (10) ゆがみて蓋ふたのあはぬ半櫃ひつ 凡兆

- (11) 草そう庵あんに暫しばらく居ては打やぶり 芭蕉
 (12) いのち嬉しき撰集のさた 去来

これで「名残表」が終わる。(9)の升降しは鼠取りで、(10)の雰囲気と合う。これを一所不在の西行の境涯と転換し、(11)、(12)とつながる。

- (1) 名ウさまさまに品かはりたる恋をして 凡兆
 (2) 浮ウ世の果は皆小町なり 芭蕉

が続く。ウ(2)は芭蕉が場所あらば、と思案していた付け句である。芭蕉の付け句の妙は(5)、(11)でもよく分かるが、凡兆、去来の付け味もなかなかうまい。

- (3) なウに故ぞ粥かゆすするにも涙ぐみ 去来
 (4) 御留ウ守となれば広き板敷 凡兆
 (5) 手ウのひらに虱しらみ這わする花のかげ 芭蕉
 (6) かすウみうごかぬ昼のねむたさ 去来

ところで「去嫌さりきらひ」というのは、もう少し古い俳諧で重要視された法式で、俳言はいごん一つ一つに季語の他、旅、神祇じんぎ、釈教しゃくぎょうなどの分類を施し、例えば旅は「三句去さんきょ」「句数一〜三」とされていて、一度旅が終わると三句以上は出せないが終わるまで、一〜三句は続けられるという種類の規則です。その使い方は上野氏の本で分かります。

四

前回で連句の解説は一応終えた。少々ポイントが甘かったが、こんどはこの「お誘い」が俳句のお誘いにもなることを期待して書くことにしよう。

実は前回の上野洋三『芭蕉七部集』は、僕の連句の知識に大きな穴のあることを教えてくれた。それを知らずに組み立てた旧作を凶々しく引用するが、その点をチェックをしながら穴を埋めたいのである。

平安時代に始まる古典連歌が、戦国時代になって俳諧連歌を生み出したが、当初は古典連歌への練習台のようなものだった。そして古典と俳諧の第一の差は、前者が「雅語」を連ねるのに対して後者が「俳言はいごん」を用いるという点にあり、それぞれの「意味づけ」に添って一巻が巻かれるのであった。ただ意味づけも問題だが、「俳言」は俗語や漢語の意味というのはよいが、「さつき雨」は雅語だが、「さつきの雨」は俳言、というような微妙な区別もあり、先ず俳言はいごんの定義がはっきりしないのが困る。これを論ずるのは厄介だが、言葉进行分类し、それらの間にある関係を付けけるという型の規則書が、芭蕉の頃にも多数出ていた。例えば、ある本では

(1) 神祇、(2) 釈教、(3) 恋、(4) 哀傷、(5) 述懐、(6) 人倫、
 (7) 居所、(8) 衣類……(24) 支躰……以下、

(29) 食物、(30) 名所、(31) 国。

など分類されており、同類の句が何句まで続けられるか(句数)、また一旦やめたら何句の間同類は出せないか(去嫌さりまひ)^{〔1〕}が分かるようになっていいる。例えば夏冬の句は一〜三句、春秋の句は三〜五句続けられるが、一旦打ち切ると五句は「去る」ことになり、一方、恋は二〜五句は続けられるが、一旦打ち切ると三句去りとなる、我々もこの辺までは知っていたのだが、大多数の言葉に句数、去嫌さりまひのあることは知らなかったのである。

この件に注意しつつ東独にいた頃の作(一九九〇)を見る。

ワイマールにて

初表

- (1) 暮れなずむ古き都や春の雨
 (2) ゲーテ、シラーの像の青草
 (3) 絵にならぬ絵とは知りつつ筆とりて
 (4) 楨の木高く秋の深まる
 (5) 欠けそめの月に築地の続く道
 (6) うしろ姿は清き白髪

(1)の春の雨、(2)の青草は俳言か雅言か？ 春の句数は三〜五句と言うのに対して二句は少ないが、これは許されるのか。この種のことは、(3)、(4)句はもとより、(5)の築地「居所」、(6)の白髪「支躰」などにも影響がある。『冬の日』の頃から俳言のない俳諧が盛んになり、去嫌への拘泥が減って、それが蕉風の確立につながる、(4)の楨と(5)の築地などには「にほひ」や「位」に通うものがあるつもりだがどうか。

- (1) 演初裏歌師のギター手あかに古びたる
- (2) ものの香りのしみし壁板
- (3) 人去りて心おちいぬ控の間
- (4) わが一代の真価問うとき
- (5) 颯ひょうとして雲飛ぶ山の巔したんに
- (6) 廢墟をむごく照らし出す月
- (7) 初秋の百物語なお果てず
- (8) かわやのあたり曼珠沙華さく
- (9) すれちがう汽車を待つ間の銀煙管きせる
- (10) どちらからかと人の問い寄る
- (11) まだ早き花の席とるごさまもり
- (12) またも入試に落ちし長男

表(5)の築地と裏(2)の壁板は共に「居所」だろうが、一旦切ると、本当は「三句去」なのに、実際は二句で、去嫌の規則に違反している。但し僕は蕉風の「響き」、「におい」等の付け味に関心があるので、以上で去嫌への言及は一応やめ、普通の付け合に補足的にふれよう。

(4)と(5)に一種の「響き」を感じないだろうか。(7)の怪談に(8)の曼珠沙華を呼び出し、(9)の見慣れぬ乗客に、人が声を掛ける。この辺りにはそれぞれ一幅の絵がある。

- (1) 茅葺名表きの家を今日まで守りこし
- (2) すす払う間も唱う念仏
- (3) 誰も来ぬことよいのやら悪いやら
- (4) 寝顔に恋の果てを知りそめ
- (5) しどけなき紅の孀じゅ絆ばんの乱れかご
- (6) 新しん内ない流し深川の夜
- (7) 救急の車の音も遠のきて
- (8) 筆は進まず締め切りは明日
- (9) 一つ蚊に大の男の空から踊り
- (10) 壁のとなりは何の騒ぎぞ
- (11) 月見ゆる気は更になきこの宵に

(12) 雨は巴山の秋に極まる

(3)は(2)の人物と何となく通い合えばいいが、案外難しい。(4)、(5)、(6)と恋、(6)は余情である。(12)の巴山は、好きな詩、李商隱の『夜雨寄北』を踏まえたものである。

- (1) 白鳥名裏の折々立つる羽の音
 (2) 水ばかりの続く海づら
 (3) 板囲い丸木鳥居やしうの社やしろにて
 (4) 思いもかけぬ巫女みこの緋袴ばかま
 (5) 来てみれば花は蕾つぼみのままながら
 (6) 草柔らかき春のくれがた

表の(11)と裏の(5)は、久々の月、花の定座である。特に名残なごりは最後の一对まで定座がなく、表現への制約が乏しいだけその表現に自由を与えている。

右で、俳言はいごんが『冬の日』の頃から目立たなくなったことにふれたが、去嫌さりきらひも同様で、その頃から現れた蕉風しよくふうの付け味つけあじ(にほひ、響きなど)は人工的な意味の差などからより高く出て、高雅の世界を目指している。今回は略すが、この変化は芭蕉の大きな力である。

もう一言加えるとなれば、芭蕉の転換の大きさは、方面こそ違え、一流の数学者や哲学者の、慣習を超えた創造力の飛躍を思い起こさせる。

(社会福祉法人新生会『こかげ』第四九〜五一号(二〇〇六年二月〜二〇〇七年二月)所載)

- 村田全先生がいろいろな媒体に発表されたものを集めた。
- 最初の「芥川龍之介の弱さについて」は初出が不明であるが、タイトルの下に「五の二 村田全」と書いてあるところから、村田全先生が旧制中学校五年生の時に書かれたものではないかと推定される。
- 最初の「芥川龍之介の弱さについて」は、村田全先生の希望によって、旧字・旧仮名遣いにした。
- 理解を助けるために、振り仮名をつけた。
- PDF化には $\text{L}^{\text{A}}\text{T}^{\text{E}}\text{X}_{2\epsilon}$ でタイプセッティングを行い、`dvipdfmx`を使用した。

科学の古典文献の電子図書館「科学図書館」

<http://www.cam.hi-ho.ne.jp/munehiro/science/sciencelib.html>

「科学図書館」に新しく収録した文献の案内、その他「科学図書館」に関する意見などは、「科学図書館掲示板」

<http://6325.teacup.com/munehitroumeda/bbs>